梨

　青い青い空に、白い雲が浮かんでいた。その大きな雲は、遠くに見える富士の山頂に覆い被さる。朝の雀は梨の木の上で、ちゅんと一声鳴いて飛んだ。
「今日も良い天気だ。」
塀に囲まれた庭に、サンダルを引っ掛けた老人が現れ、言う。嗄れた声が人気の無い、この場所に響いた。風が、私の葉を揺らして通ると、遠くから砂を踏む音が聞こえる。
「おじいちゃん、お腹空いたー。何で、こんなに寒いところにいるの？」
「ああ、たかしか。たかし、朝はね、まず起きたら空気を、たくさん吸うんだ。そうすると、神様が体に、たくさんの元気を送ってくれるのだよ。」
たかしと呼ばれた少年もまた、雀のように小首をかしげ、祖父の皺の刻まれた笑顔を見上げた。白い吐息が、顔を覆う。空には三日月が、かすかに浮かんでいた。もうしばらくすれば、月は太陽に場所を譲るだろう。たわわに実った実を揺らしながら、私はそれを思う。私は、この宇宙を構成する意識そのもの。宇宙の中のひとつ。宇宙という体の中の、ひとつの細胞。完全なる調和の中で、私は地球という母なる意識と同調する。
　ふいに私の枝がきしんだ。もみじよりも、ひとまわり大きいくらいの、たかしの手が、私の実を抱くように包んでいる。下へ下へ、枝は弓なりに曲がる。ぱちり、と実は、ついにもげて、たかしの手に収まった。
「取れた。」
白く艶めく肌を、いっそう艶めかせ、たかしは笑う。
「食べると良い。今日も元気で過ごせるよ。この梨はね、たかしが生まれる前から、ずうっと、ここに植えられているんだ。」
「ふうん、長生きなんだね。僕よりも、おじいちゃんよりも、長生きするのかな。」
「それはどうだろうね。おじいちゃんは、きっと、梨よりも先に死んでしまうだろうけれどもね。」
たかしは眉を八の字にさせて、体を小さくさせた。私を見上げる老人は目を細め、友人に向けるような、まなざしを私に投げかけている。私は、その愛しいまなざしに答える。この世界に生きるものたちに恩恵を与えられるように。
たかしもまた、私を見上げた。この小さな子供も、この世界に生きる。あなたが生きていけるように、私は与えよう。
梨の実は、たかしのぬくもりに包まれながら、彼に身を任せる。さあ、私を食べなさい。私は、あなたのためにあるのよ。愛しいあなたに甘い想いを注ぐから。あなたは私の声が聞こえないかもしれない。けれども、それで良いのよ。あなたは私たちとともに生

き続けるのだから。あなたは私そのもの。愛しい子よ、私は嬉しい。さあ、全てをあげましょう。一緒に生きましょう。